今井　宏　教授の略歴と業績

一九三〇年　九月二日　母の実家があった大阪市阿倍野区阿倍野筋三―四三で生まれる。以後、父の任地の関係で、金沢、大阪、東京、佐賀、津、東京に居住（小学校の転校三回）。

一九四五年　三月一〇日　東京大空襲にあい、父が赴任していた水戸に疎開、東京都立第一中学校（現在の日比谷高校）から茨城県立水戸中学校（現在の水戸一高）に転校。日立兵器勝田工場に勤労動員。八月一日の空襲により住居全焼。八月一五日、一五歳で「終戦」を迎える。

一九四九年　水戸高等学校（旧制）文科甲類第一学年修了。

一九五三年　茨城大学文理学部文学科（史学専攻）卒業。

一九五五年　東京大学大学院人文科学研究科（西洋史専攻）修士課程修了。文学修士号取得。

一九五八年　同博士課程単位修得満期退学。

一九五八年　東京女子大学文学部専任講師

一九六〇年　同　助教授

一九六七年　同　文理学部教授

〔東京女子大学における役職〕

一九七〇年四月～一九七六年三月　東京女子大学付属比較文化研究所主任

一九八五年四月～一九八九年三月　東京女子大学図書館長

一九九二年四月～一九九八年三月　東京女子大学大学院文学研究科会議議長兼大学院合同研究科会議議長

一九九六年六月～一九九八年五月　東京女子大学八〇年誌編纂委員会委員長

一九九七年七月～九月　東京女子大学学長補佐

一九九七年九月～一九九八年三月　東京女子大学学長代行補佐

〔非常勤講師〕

一九六〇年四月～一九六二年三月　東京歯科大学
一九六二年九月～一九六八年三月　国際基督教大学（教養学部社会科学科）
一九六三年九月～一九六四年七月　立教大学（文学部）
一九六五年四月～一九九〇年三月　東京大学（教養学部教養学科「イギリスの地域と文化」コース）但し一九六六年度夏学期のみ「一般教養歴史学」をも担当
一九六八年一〇月～一九七三年三月　国際基督教大学（教養学部社会科学科）
一九七三年四月～一九七六年三月　慶応義塾大学（文学部）
一九七四年四月～一九七五年三月　立教大学（文学部・大学院文学研究科兼担）
一九七五年四月～一九七七年三月　東京大学（文学部）
一九七六年四月～一九七七年三月　立教大学（大学院文学研究科）
一九七七年四月～一九八二年三月　慶応義塾大学（大学院文学研究科）
一九七七年四月～一九八五年三月　国際基督教大学（大学院比較文化研究科）
一九七九年九月～一九八〇年三月　立教大学（大学院文学研究科）
一九八三年四月～一九八八年三月　成蹊大学（文学部）
一九八五年四月～一九八六年三月　東京大学（文学部）
一九八六年四月～一九八七年三月　立教大学（大学院文学研究科）
一九九六年四月～　聖心女子大学（文学部）

〔集中講義〕

一九六〇年度　茨城大学（文理学部）
一九六三年度　茨城大学（文理学部）
一九七一年度　岡山大学（法文学部）
一九七二年度　北海道大学（文学部）
一九七三年度　山梨大学（教育学部）
一九七四年度　九州大学（文学部・大学院文学研究科兼担）
一九七五年度　千葉大学（人文学部）
一九七七年度　山形大学（人文学部）
一九七七年度　山梨大学（教育学部）
一九七八年度　静岡大学（人文学部）
一九八一年度　名古屋大学（文学部・大学院文学研究科兼担）
一九八四年度　北海道大学（文学部・大学院文学研究科兼担）
一九八四年度　京都大学（文学部・大学院文学研究科兼担）
一九八四年度　東京都立大学（人文学部）
一九八七年度　東北大学（文学部・大学院文学研究科兼担）
一九八九年度　静岡大学（人文学部）

〔学会ならびに社会における活動等〕

文部省「大学設置・学校法人審議会大学設置分科会専門委員」
一九八九年四月～一九九三年三月

財団法人史学会評議員
一九八九年四月～一九九二年三月

日本学術振興会「特別研究員等審査会専門委員」
一九九三年四月～一九九五年三月

史学会委員
一九五七年～一九六一年

史学会評議員
一九八九年～一九九〇年

一、著書

1、『クロムウェル――聖者の進軍』
誠文堂新光社　一九六一年

2、『絶対君主の時代』
（河出書房版『世界の歴史』第一三巻）
河出書房新社　一九六九年
（文庫版　一九八九年）

3、『クロムウェル――ピューリタン革命の英雄』
清水書院　一九七二年

4、『明治日本とイギリス革命』
研究社出版　一九七四年

5、『イギリス革命の政治過程』
未来社　一九八四年

6、『ヒストリカル・ガイド・イギリス』
山川出版社　一九九三年

7、『明治日本とイギリス革命』（新版）
（「ちくま学芸文庫」）筑摩書房　一九九四年

8、『日本人とイギリス――「問いかけ」の軌跡』
（「ちくま新書」）　筑摩書房　一九九四年

二、編著書

1、『イギリス史研究入門』
（青山吉信・松浦高嶺・越智武臣氏と共編）
山川出版社　一九七三年

2、『概説イギリス史』
（青山吉信氏と共編）有斐閣　一九八二年

3、『世界歴史大系――イギリス史　2（近世）』
山川出版社　一九九〇年
（第四章、第六章、補説九・一三・一四・一六を執筆）

4、『身分制・議会・民主制』（責任編集）
（『週刊朝日百科　世界の歴史』九二号）
朝日新聞社　一九九〇年

5、『人物世界史』（西洋編）
一、古代　～一七世紀
二、一八世紀～二〇世紀
山川出版社　一九九五年

三、訳書

1、G・M・トレヴェリアン『イギリス史二』
(G.M.Trevelyan, *History of England*,3rd ed.1974)
(大野真弓監訳、第四編二・三・四・五・六章を担当)
みすず書房　一九七四年

2、トレヴァ・ローパー他『十七世紀危機論争』
創文社　一九七五年

3、R・C・リチャードソン『イギリス革命論争史』
(R.C.Richardson, *The Debate on the English Revolution*,1977)
刀水書房　一九七九年

4、G・M・トレヴェリアン『イギリス社会史二』
(G.M.Trevelyan, *English Social History*,1942)
(松浦高嶺［中野好之・村岡健次］氏と共訳)
みすず書房　一九八三年

5、ジョン・ケニヨン『近代イギリスの歴史家たち
——ルネサンスから現代へ』
(John Kenyon, *The History Men: the Historical Profession in England since Renaissance*,1983)
(大久保桂子氏と共訳)
ミネルヴァ書房　一九八八年

6、エイザ・ブリグッズ『イギリス社会史』
(Asa Briggs, *A Social History of England*,1994)
(中野春夫・中野香織氏と共訳)
筑摩書房　一九九九年

四、編訳書

1、(監修・翻訳)『全訳　世界の歴史教科書シリーズ
イギリス——その人々の歴史』全五巻
第一巻（松本宣郎訳）
第二巻（朝倉文市訳）
第三巻（今井　宏・大久保桂子訳）
第四巻（河村貞枝訳）
第五巻（木畑洋一訳）
(R.J.Cootes & L. E. Snellgrove, *Longman Secondary Histories*, 5 vols.,1970-81)
帝国書院　一九八一年
〔一九八三年日本翻訳家協会日本翻訳出版文化賞受賞〕

2、(監修) J・M・ロバーツ『ペンギン版図説・世界の歴史』
全八巻
(J.M.Roberts,*An Illustrated World History*, 5 vols., 1981)
第四巻（小泉徹訳「さまざまな文明の興亡」）
第五巻（大久保桂子訳「むすびつく世界・ヨーロッパ文明の進出」）
第六巻（青木康訳「ひとつになる世界・ヨーロッパ文明の優位」）
小峰書店　一九八二年

3、(監修)『図説　世界の歴史』全八巻
学習研究社　一九八一年

五、高校教科書編集・執筆

1、『高等世界史』　帝国書院
2、『新詳世界史』　帝国書院

六、論文

1、「イギリス革命における『プロテクター』政権の成立」
『史学雑誌』第六六篇一〇号　一九五八年
（『イギリス革命の政治過程』未来社、一九八四年に収録）
2、「独立派の政治理念」
水田洋編『イギリス革命――思想史的研究』御茶の水書房、一九五九年
（『イギリス革命の政治過程』未来社、一九八四年に収録）
3、「長期議会における教会改革の問題」
『東京女子大学論集』一〇巻二号　一九五九年
4、「イギリス革命における独裁機構――軍政官制度について」
岩間徹編『変革期の社会』御茶の水書房、一九六二年
（『イギリス革命の政治過程』未来社、一九八四年に収録）
5、「イギリス革命の政治過程分析――ひとつの覚え書き」
『史論』（東京女子大学）第一〇集　一九六二年
6、「クロムウェルの言論統制」（一）（二）
『東京女子大学論集』一四巻二号・一五巻一号　一九六四年
（『イギリス革命の政治過程』未来社、一九八四年に収録）
7、「イギリス革命における『地方』の問題」
『史論』（東京女子大学）第一二集　一九六四年
（『イギリス革命の政治過程』未来社、一九八四年に収録）
8、「ピューリタン革命の政治史的研究――その最近の動向を中心に」
『史論』（東京女子大学）第一七集　一九六七年
9、「明治時代におけるイギリス革命観」
『東京女子大学比較文化研究所紀要』二六号　一九六九年
10、「イギリス革命」
『講座世界歴史』第一五巻近代二、岩波書店、一九六九年
（『イギリス革命の政治過程』未来社、一九八四年に収録）
11、「明治時代におけるピューリタニズム観」
『東京女子大学比較文化研究所紀要』三二号　一九七二年
12、「イギリス革命研究の問題点」
柴田三千雄・松浦高嶺編『近代イギリス史の再検討』御茶の水書房、一九七二年
（『イギリス革命の政治過程』未来社、一九八四年に収録）
13、「明治時代におけるホイッグ史観の受容」
『東京女子大学比較文化研究所紀要』三五号　一九七四年
14、「王政復古とミルトン」
平井正穂編『ミルトンとその時代』研究社出版、一九七四年
（『イギリス革命の政治過程』未来社、一九八四年に収録）
15、「T・B・マコーリー断章」
『史論』（東京女子大学）第三五集　一九八二年

16、"*British Influence on Modern Japanese Historiography*", Saeculum. XXXVIII, Heft, 1987
17、「イギリスにおける『共和政』について」『東京女子大学比較文化研究所紀要』五一号　一九九〇年
18、「ピューリタン革命における国王弑逆者について」『史論』（東京女子大学）第四七集　一九九三年

七、書評・動向など

1、「一九五五年の歴史学界――西洋近世・近代」（遅塚忠躬氏と共同執筆）『史学雑誌』六五篇五号　一九五六年
2、「浜林正夫著『イギリス市民革命史』」『歴史学研究』二四一号　一九六〇年
3、「田村秀夫著『イギリス革命思想史――ピューリタン革命期の社会思想』」『史学雑誌』七一篇六号　一九六二年
4、「一九六五年の歴史学界――近代・イギリス」『史学雑誌』七五篇五号　一九六六年
5、「越智武臣著『近代英国の起源』」『西洋史学』七二号　一九六七年
6、「一九六六年の歴史学界――近代・イギリス」『史学雑誌』七六篇五号　一九六七年
7、「浜林正夫著『イギリス革命の思想構造』」（松浦高嶺・田中浩・田村秀夫氏と共同執筆）『商学討究』（小樽商科大学）一七巻四号　一九六七年
8、「一九七〇年の歴史学界――近代・イギリス」『史学雑誌』八〇篇五号　一九七一年
9、「クリストファ・ヒル・福田良子訳『イギリス革命の思想的先駆者たち』」『史学雑誌』八二篇一一号　一九七三年
10、「一九七五年の歴史学界――ヨーロッパ近代一般」『史学雑誌』八五篇五号　一九七六年
11、「大野真弓著『イギリス絶対主義の権力構造』」『史学雑誌』八七篇四号　一九七八年
12、「一九七七年の歴史学界――近代・イギリス」（青木康・村岡健次氏と共同執筆）『史学雑誌』八七篇五号　一九七八年
13、「近代イギリス」『日本における歴史学の発達と現状』V、第九章第三節の一　東京大学出版会　一九八〇年
14、「香内三郎『活字文化の誕生』」『エコノミスト』（一九八三・五・二四）　一九八三年
15、「村岡健次・鈴木利章・川北稔編『ジェントルマン・その周辺とイギリス近代』」『史学雑誌』九七篇七号　一九八八年
16、「若原英明著『イギリス革命研究』」『史苑』（立教大学）五〇巻一号　一九九〇年
17、「田村秀夫編『イギリス革命と千年王国』」

田村秀夫『社会思想史の視点――研究史的接近』」
『社会思想史研究』一五号　一九九一年
18、「越智武臣『近代英国の発見――戦後史学の彼方』」
『史学雑誌』一〇一篇一一号　一九九一年
19、「小川晃一『英国自由主義体制の形成』」
『歴史学研究』六五五号　一九九四年
20、（翻訳）G・M・トレヴェリアン「歴史と読者」
『みすず』二七八号　一九八三年

八、学会発表

1、**史学会**

第五四回大会　一九五七年一一月
「独立派の政治理念――ジョン・ゴドウィンの場合」
第九二回大会公開講演　一九九四年一一月一二日
「イギリス革命における共和主義」

2、**日本西洋史学会**

第七回（東京大学教養学部）　一九五六年五月一九・二〇日
共通課題『市民革命』
「プロテクトレート」の成立
第一六回（岡山大学）　一九六五年五月二二・二三日
「イギリス革命における共和主義思想」
第一七回（立教大学）　一九六六年五月二一・二二日
共通課題『近代市民社会形成過程の再検討』
「議会制民主主義の形成過程」

3、**十八世紀学会**

第五回大会（一橋大学）　一九八三年六月一二日
共通論題『歴史』
「ホイッグ史観の形成」

4、**京都大学西洋史読書会**

第五〇回大会　一九八二年一一月三日
記念シンポジウム『西洋史研究の過去と現在』
「戦後前期　混乱の中から」

九、分担執筆など

1、「イギリス宗教改革とテューダー朝の発展」
『世界史大系』第九巻「近代の生誕」
誠文堂新光社　一九五七年
2、「絶対主義」
秀村欣二編『封建社会の崩壊―東大教養西洋史二』
東京創元社　一九六〇年
3、「イギリス革命」
『世界の歴史』第一〇巻「絶対主義」
筑摩書房　一九六一年
4、「ピューリタン革命」
『世界の戦史』第五巻　人物往来社　一九六六年
5、「絶対主義」
木村尚三郎編『封建社会の崩壊―東大教養西洋史二』
東京創元社　一九六八年

6、「イギリス革命」
中屋健弍編『近代社会の成立—東大教養西洋史三』
東京創元社　一九六八年

7、「産業革命」
中屋健弍編『近代社会の成立—東大教養西洋史三』
東京創元社　一九六八年

8、「清教徒革命とクロムウェル」
『日本と世界の歴史』第一四巻「一七世紀」
学習研究社　一九七〇年

9、「歴史と政治」
朱牟田夏雄編『十八世紀イギリス研究』
研究社出版　一九七一年

10、「イギリス議会政治への問いかけ——福沢諭吉を中心にして」
自由社編『英国と日本』
自由社　一九七五年

11、「イギリス史の流れと特質」
『文化誌、世界の国』第一二巻「イギリス」
講談社　一九七五年

12、「情熱に生きた女王——メアリ・ステュアート」
『世界の女性史』第六巻「忍従より自由へ」
評論社　一九七六年

13、「ニュートンの時代と社会」
渡辺正雄編『ニュートンの光と影』
共立出版　一九八二年

14、「立法制度と議会」
安東伸介・小池滋・出口保夫・船戸英夫編『イギリスの生活と文化事典』
研究社出版　一九八二年

15、「イギリスと日本」
青山吉信編『実像のイギリス——変わるものと変わらないもの』
有斐閣　一九八四年

16、「歴史」
小池滋監修『イギリス』（『世界の歴史と文化』）
新潮社　一九九二年

一〇、百科事典などの執筆

1、『世界史小事典』
山川出版社

2、『アポロ百科事典』
平凡社

3、『ジャンルジャポニカ』（「世界歴史」ならびに「政治・経済」の巻）
小学館

4、『ブリタニカ国際百科事典』
TBSブリタニカ

5、『大百科事典』（兼編集委員）（のちに『世界大百科事典』と改題）
平凡社

6、『日本大百科全書』（兼編集委員）
小学館

7、『歴史学事典』第四巻、第五巻
弘文堂

一一、新聞企画・書評欄など

1、『東京新聞』「世界史の女」（サンデー版に連載）
（1）アン・ブーリン
一九八四・三・一八

(2) メアリ・ステュアート　一九八四・四・一
(3) セアラ・チャーチル　一九八四・六・三
(4) エリザベス一世　一九八四・四・二九
(5) エマ・ハミルトン　一九八四・八・一二
(6) ヴィクトリア女王　一九八四・一一・四
(7) アン・ハサウェー　一九八四・四・一五
(8) メアリ・シェリー　一九八四・九・九
(9) ジェーン・オースティン　一九八四・一〇・二一
(10) ブロンテ姉妹　一九八四・一〇・七
(11) ジョージ・エリオット　一九八四・一一・二五
(12) ベアトリクス・ポッター　一九八五・六・二
(13) マリー・ロイド　一九八五・八・一一
(14) モンタギュ夫人　一九八五・二・二四
(15) フローレンス・ナイティンゲール　一九八四・一二・一六
(16) パンカースト夫人　一九八五・四・二八
(17) ウェッブ夫人　一九八五・五・一二

《中日新聞編『世界史の女』全四巻、講談社、一九八五年に収録》

2、『東京新聞』書評欄に掲載したもの

(1) マルク・フェロー・井上幸治監訳（大野一道・山辺雅彦訳）『監視下の歴史――歴史学と歴史意識』　一九八八・二・一五
(2) 樋口謹一編『空間の世紀』　一九八八・五・九
(3) 上野美子『ロビン・フッド伝説』　一九八八・八・一
(4) 山崎正和編『都市開幕――国家と世界をつないで』　一九八八・一〇・二四
(5) 阿部謹也『西洋中世の罪と罰――亡霊の社会史』　一九八九・二・二〇
(6) S・ランシマン『十字軍の歴史』　一九八九・四・九
(7) R・ペルヌー『十字軍の男たち』　一九八九・九・三
(8) 樺山紘一『パリとアヴィニョン――西洋中世の知と政治』　一九九〇・五・一五
(9) 近藤和彦・野村達朗編訳『歴史家たち』　一九九〇・六・一七
(10) アリエス『図説　死の文化史』　一九九〇・七・二九
(11) キャロリー・エリクソン『アン・ブリンの生涯』　一九九〇・一〇・七
(12) ギー・ド・ロスチャイルド『ロスチャイルド自伝』　一九九〇・一二・九
(13) ハロルド・ラスキ『イギリスの議会政治』　一九九一・一・六
(14) 清水憲男『ドン・キホーテの世紀――スペイン黄金時代を読む』　一九九一・二・一〇
(15) 高橋哲雄『アイルランド歴史紀行』　一九九二・一・一二
(16) 森嶋通夫『政治家の条件――イギリス、EC、日本』　一九九二・一・二六

(17) ロバート・W・マーカムソン『英国の民衆娯楽』
一九九三・八・一
(18)「読書好日①——高橋哲雄『二つの大聖堂のある町』」
一九九三・六・一三
(19)「読書好日②——ジョン・オーブリ『名士小伝』」
一九九三・六・二〇
(20)「読書好日③——トレヴァ・ローパー『北京の隠者』」
一九九三・六・二七
(21) 石井美樹子『薔薇の冠——イギリス王妃キャサリンの生涯』
一九九三・一一・一四
(22) エドワード・ギボン『ギボン自伝』
一九九五・一・三

3、『週刊読書人』に掲載したもの

(1) E・ウィリアムズ『帝国主義と知識人——イギリスの歴史家たちと西インド』 一九七九・六・二五
(2) E・J・ホブズホーム『産業と帝国』
一九八四・九・一七
(3) 若原英明『イギリス革命史研究』一九八九・二・一四
(4) 永岡薫・今関恒夫編『イギリス革命におけるミルトンとバニヤン』
一九九一・一二・一六

他に、同紙の一九八〇年から一九八六年の「回顧——動向と収穫」特集の「世界史」を担当。

4、『歴史と地理』〈世界史の研究、山川出版社〉に掲載したもの

論文
(1)「常備軍と官僚制」 四九号 一九六六年一〇月
(2)「クロムウェルを通して」 八七号 一九七六年 五月

新刊紹介
(1) アイヴス編・越智武臣監訳『英国革命一六〇〇—一六六〇』 八一号 一九七四年一一月
(2) 浜林正夫『魔女の社会史』九六号 一九七八年 八月
(3) バンクス夫妻・河村貞枝訳『ヴィクトリア時代の女性たち——フェミニズムと家族計画』
一〇三号 一九八〇年 五月
(4) 浜林正夫・神武庸四郎編『社会的異端者の系譜——イギリス史上の人々』 一四二号 一九九〇年 二月
(5) 吉岡昭彦『歴史への旅』一四四号 一九九〇年 八月
(6) 小池滋『もうひとつのイギリス史』
一五〇号 一九九二年 二月
(7) オリーヴ・チェックランド・杉山忠平・玉置紀男訳『明治日本とイギリス——出会い・技術移転・ネットワークの形成』 一七一号 一九九七年 五月

5、『比較文化』(東京女子大学比較文化研究所)に掲載したもの

(1)「座談会 外国文化へのアプローチ」
(岩間徹・久米あつみ・栗原福也・小川圭治・高橋道氏と、司会吉田熙生氏) 一七、 一九七一年 三月

(2)「対談　比較文化研究所の可能性」
(D・F・ウィラー氏と)
二〇―一、一九七三年一〇月
(3)「回顧と展望」
二三―一、一九七六年　七月
(4)「トマス・カーライルのこと」
二八―一、一九八一年一〇月
(5)「第一回公開シンポジウム『岩倉使節団と近代日本』」
(大久保利謙・田中彰・芳賀徹氏、司会今井宏)
三〇―二、一九八四年　三月
(6)「第二回公開シンポジウム『福澤諭吉と新渡戸稲造――そのナショナリズムとインターナショナリズム』」
(飯田鼎・隅谷三喜男・松澤弘陽氏、司会今井宏)
三一―一、一九八四年一〇月
(7)「座談会　比較文化研究所の創設期を振返る」
(紙上参加)「混乱の一時期の回想」
三六―二、一九九〇年　三月
(8)「第一〇回公開シンポジウム『コロンブス五〇〇年――世界史転換の時期に』」
(伊東俊太郎・加茂雄三・川北稔氏、司会今井宏)
三九―一、一九九二年一〇月
(9)「比較文化研究所所蔵の英和辞書のことなど」
四一―二、一九九五年　三月

一二、学内ならびに学外における活動

1、東京女子大学比較文化研究所公開シンポジウム(司会)
第一回「岩倉使節団と近代日本」　一九八三年一一月五日
(大久保利謙・田中彰・芳賀徹氏)
第二回「福澤諭吉と新渡戸稲造――そのナショナリズムとインターナショナリズム」　一九八四年六月三〇日
(飯田鼎・隅谷三喜男・松澤弘陽氏)
第一〇回「コロンブス五〇〇年――世界史転換の時期に」
一九九二年一〇月四日
(伊東俊太郎・加茂雄三・川北稔氏)

2、東京女子大学同窓会講座
A、イギリスの歴史(全五回)　一九八〇年五月～　七月
B、ヨーロッパの都市――その歴史をさぐる
(第一次　全八回)　一九八三年四月～　六月
(第二次　全六回)　同年　九月～一二月
C、日本人にとってのイギリス(全六回)
一九九二年九月～一一月

3、東京女子大学夏期講座
主題『歴史』　一九九二年七月四日
「マコーリーからトレヴェリアンへ――イギリス歴史学の伝統」

4、杉並区内大学公開講座
「イギリスへの問いかけ――日英関係史から」(全一〇回)
一九九一年一〇月～一二月

5、東京女子大学読史会大会　一九九二年一〇月一七日
（講演）「イギリス革命における共和政」
（シンポジウム）『女性の眼でイギリス史を読む』
（井野瀬久美恵・大久保桂子氏、司会今井宏）
6、東京女子大学文理学部一九九六年度始業講演
「ピューリタン革命に生きた二人」
7、東急セミナー渋谷BE
（1）イギリス――世界強国への道
一九九〇年一〇月　四日―一九九一年　三月　七日
（2）イギリスと日本――日英関係の歴史を辿る
一九九一年　四月　四日―一九九一年　九月一九日
（3）議会を通して見るイギリス史
一九九一年一〇月　三日―一九九二年　一月一六日
（4）人物イギリス史
一九九二年　四月一六日―一九九二年　九月一七日
（5）人物イギリス史
一九九二年一〇月　一日―一九九三年　三月　四日
（6）イギリス史――大英帝国の光と影
一九九三年　四月一五日―一九九三年　七月二九日
（7）イギリス史――二〇世紀のイギリス
一九九三年一〇月　七日―一九九四年　一月一三日
（8）史料で読むイギリス史I
一九九四年　四月　七日―一九九四年　七月一八日
（9）史料で読むイギリス史II
一九九四年一〇月　六日―一九九五年　二月　二日
（10）キーワードでイギリス史を読む
一九九五年　四月　六日―一九九五年　七月二〇日
（11）イギリスとヨーロッパ
一九九五年一〇月　五日―一九九六年　二月　一日
（12）イギリス史を探るI（その「近代化」の特徴）
一九九六年　四月　四日―一九九六年　七月一八日
（13）イギリス史を探るII（その文化の特徴）
一九九六年一〇月　三日―一九九七年　一月三〇日
（14）イギリス史を探るIII（イギリス史を構成するもの）
一九九七年　四月　三日―一九九七年　七月一七日
（15）イギリス史の女性たちI（愛と権力をめぐって）
一九九七年一〇月　二日―一九九八年　一月二九日
（16）イギリス史の女性たちII（文学・芸術を彩る）
一九九八年　四月　二日―一九九八年　七月一六日
（17）イギリス近・現代史再考
一九九八年一〇月　一日―一九九九年　二月一八日
8、渋谷区立上原社会教育館　歴史講座「イギリス」
（全一〇回）
一九九八年　九月二二日―一九九八年一二月　八日

他に、朝日カルチャー・センター、NHK文化センターにも出講